



2026 年 11 月
第 779 号

日本基督教団 平塚教会
発行人 平塚教会
編集人 日下部 明美
〒254・0045 平塚市見附町 6・18
電話 0463 (32) 8831



何もしなければ無事・無難

平塚教会 北川一明

あなたがたも祈りで援助してください。

(Ⅱコリント 一・11 より)

永眠者記念礼拝、台湾フェスティバル、子ども合同礼拝、西湘南地区信徒研修会と続いた後は、もうアドベントです。教会が何か大きな催しを企画したら「楽しそうだ、参加したい」と思うでしょうか。それとも逆に「忙しいのに、誰がその負担を担うのか」と感じるでしょうか。肯定・否定のどちらでも、教会行事をそうした次元だけで捉えては、町内会の行事と変わらないことになってしまいます。

昨年のオープンチャートでは、献身的に働いてくださったかた、様々なかたちで協力してくださったかたのおかげで、当日は滞りなく進みました。それでも「少し残念な結果だった」と私は何度かお話し

しました。

「あれだけやったのに」と不審に思いかたもあるでしょうか。働く人の傍らで「誰が何をやっているの？」で終わった人もあり、知らなかった人さえいたという状態が残念なのです。教会全体で祈って備えることができなかったからです。

全員が働かなければならないものではありません。一部の人の働きを教会全体の信仰の業にするためには、全員の祈りが必要だったのです。祈って共に担う教会になっていない、教会運営の問題です。

信仰者にとって、教会はサービスを受ける場ではありません。サービスを提供する場です。その相手は神と世界であり、その根本にあるのが礼拝と祈りです。祈りは、教会を神に仕えるものにしていくための大切な奉仕です。

病者を励ますのに、教会では「何もできなくても祈ることはできます」と言います。これがタテマエの綺麗事になっているとしたら、言う側が、祈りに

《 目 次 》

何もしなければ無事・無難	牧師 北川一明	・・・1
出会いは恵み	堰 仁美	・・・3
たのしかった運動会	青木 恵美、編集後祈	・・・4

よって何が起こるかを本気で考えていないのです。

たとえば、病床で寝たきりの信徒が教会の行事のために祈っていたとします。何の手伝いもできません。当日も参加できません。それでも「来会者が少しでも神の恵みに触れるように／働く人たちが良い奉仕をして神に喜ばれるように」と真剣に願う。それが祈るということです。

そこへ教友が訪ねてきたら「準備は大変ですか／あの件は大丈夫でしたか」と問うはずです。話題が欲しいからではありません。自分の願いがどうなったかを知りたいのです。

訪ねた人が、中心になって働いている人であれば、どれほど励まされることでしょう。何か事を為せば、必ず何かしらの問題が起きます。病床でここまで心配して祈ってくれていた人がいたと知り、自分だけの苦労ではなかったと分かります。

逆に、行事に関心を持っていなかった

た人は、質問に答えられません。「この人は寝たきりなのに、神のため、教会のためにこれだけ考えていたのか」と恥じるでしょう。次にはちゃんと答えられるようでありたいと、自分も何らかのかたちで関わり始めます。

寝たきりの人が働く人を励まし、無関心だった人を動かします。祈ることです。神に仕えているのです。こうして行事は教会全体の信仰の業となり、神の永遠の御業への参加になります。

やり終えた後に残るのは達成感だけではありません。「私たちは共に神に仕えることができる」という、教会の将来への希望です。それは、自分も神の御業に用いられるという、自分と神との関係への希望でもあります。

最近では多くの教会で一部の人が忙しく働き、他の人はそのサービスを受けるという傾向が見られます。同じ信徒が奉仕者と受益者に分かれてしまうのです。祈りが少なければ、その分断

から悪循環が生まれます。

具体的な働きのできない人は、それに負い目を感じ、教会の交わりが負担になって、教会から離れていきます。祈りによって共に担う道があるのに、それが見えなくなっているのです。

いっぽう教会教育ができていないと「私は会員なのだから、教会はもっとサービスすべきだ」と考える人もあるでしょう。そうした人に振り回されると伝道どころではありません。内輪の満足を優先して、何年も新来会者の定着しない教会になります。

「祈る」とは、自分たちの計画に神のお墨付きをもらうことではありません。「無事に終わりますように」だけなら、何もしないのが最も無難です。神はこの機会に、私たちを通して何をなさろうとしているのか。そのために私たちはどう変わればよいのか。自分の都合も好みも、神の御前で問い直すのが祈りです。

出会いは恵み

堰 仁美

「主に従う人よ、主によって喜び歌え。主を賛美することは正しい人にふさわしい。」（詩編 三三・1）

私と音楽との出会いは、母に連れられ、ヤマハ音楽教室に通った時です。三歳の春でした。

教会での音楽、賛美との出会いも、きつと同じ頃だったと思います。

きちんとした記憶にあるのは、教会学校で歌った「こどもさんびか」です。

「ひかり、ひかり、私たちはひかりの子ども」大好きでした。きつと深い意味もわからず、でも心が晴れやかになる。教会学校でのさんびか、そしてオルガンの音色が子ども心に深く残っています。

母の父（私にとっては祖父）は、山梨の田舎から若い時に東京に出て、キリスト教に出会い、クリスチャンになりました。そして家庭を持ちました。が、東京大空襲で亡くなりました。

でも信仰は子どもたちに受け継がれ、母から私へと続いています。

祖母は「聖歌」が好きで、中学生になった私のピアノの伴奏と一緒に歌いました。祖母のリクエストは幅広く、私の知らない聖歌も多く大変でした。

でも、今思うと、この事が後々の奏樂の奉仕のための訓練の始まりだったのかも知れません。

私は高校二年の春、イースターに受洗しました。ずっと教会学校から育てられてきたので、何の迷いも疑いもありませんでした。

受洗したら、礼拝の奏樂の奉仕をさせていたのだのは、当たり前でした。

当時はリードオルガンで、足踏みは慣れるまでは大変でしたが、慣れると呼吸に会わせて心地良い感覚でした。

音楽の道に進んだ私は学校でも家でも教会でも、音楽と一緒にしました。

教会では用いられることが喜びでした。ずっと横浜のカンバーランドキリスト教会 希望が丘教会での信仰生活でしたが、夫の転勤で三重県松阪市に転居しました。

バプテスト宣教団 松阪教会での教会生活になり、礼拝

の奏樂や賛美の奉仕をさせていただきました。

そこで出会ったのが、アメリカ

力からの宣教師の女性でした。

彼女と連弾で奏

樂したり、楽しい思い出です。

彼女が定年で帰国する際、たくさんの楽譜（アメリカの）を、私にと残してくれました。それは、もちろん英語の讚美歌ですが、原曲は私も知っている讚美歌をアレンジした楽譜が多くありました。その時は貰っても使うことがあるのか？と、思いました。

十三年の松阪での生活から、また横浜に戻ることにになり、希望が丘教会での教会生活が始まりました。

戻った当初は、浦島太郎のようでしたが、また奉仕をさせていただくことで馴染んでいくことができました。

教会では、付属の幼稚園のお母様方が



既存のコーラスの会とは違う賛美を歌
たいと、「シャロンの会」が結成され
ていました。

私が希望が丘教会に戻った時、指導者
が辞められ、休会状態でした。

賛美したいという思いは一緒でしたの
で、指導者となり今に至っています。
選曲が一番悩むところですが、その時
に松阪から持ち返った楽譜がここで役
に立ちました。

神さまはいろいろな所での出会いを
通して、私に最善のことを成して下さい
ました。感謝です。

その後、那須へ移住、また神奈川の
秦野へ転居など
で平塚教会に導
かれました。そ
して、この六月
から奏楽の奉仕
をさせていただ
いています。足
りないところも
多々あります
が、共に主を賛
美する喜びを分



かち合いたいと願います。

たのしかった運動会

青木 恵美

10月12日、二葉幼稚園の子どもた
ちは、崇善小学校の体育館で運動会を
しました。お天気にも恵まれ、気持ち
良くスタートすることができました。

体育館には、子ど
もたちが描いた絵
や手形スタンプ、
競技に出てくるア
イテム（おぼけ・
天狗のうちわ・惑
星）楽しい物が飾
られ、広い体育館
いっぱい、二葉
幼稚園の子どもた
ちの手作りの可愛
らしさ、楽しさが溢れる素敵な会場に
変身しました。



楽しみにしていた運動会が始まりま
した。放送係の年長さんが競技説明を
したり、「○○君ががんばってください」

と、応援しながら競技の進行をしたり、
年中さんは競技に使う用具を運んだり
片づけたり。スタートの笛を吹くのも
ゴールテープを持つのも子どもたちで
す。

子どもたちは、自分の役割も楽しん
でいるように思いました。競技は、子
どもたちの可愛いダンスやかけっこ、
楽しい面白い競技がいっぱいありまし
た。真剣な表情や緊張している子、楽
しそうな笑顔：、子どもたちの表情は
いろいろありました。運動会を楽しみ
最後までやりきった子どもたち、園長
先生から『金メダル』をもらってとて
もうれしそうでした。

《編集後祈》

ご在天の父なる神様、おとずれ第
779号の発行を感謝します。

天候も良き時を
お与えくださり、
アドベントに
向かって
信仰と健康をお守り下さい。

